

健康寿命の延伸で関心高まる「未病」

◆健康か病気かでなく、両者を連続的に捉える「未病」という考え方

「健康寿命の延伸」が注目されるなか、健康か病気かという二分論ではなく、健康と病気を連続的に捉える「未病」への関心が高まっている。未病とは、まだ病気の症状は表に出ていないが、治療をしなければさまざまな合併症を発症するという状態を指す。肥満やメタボリックシンドロームは未病の代表例になる。

1997年に設立された「日本未病システム学会」では、糖尿病も合併症がない限り、未病として対応すべきとしている。また、一口に未病と言ってもその状態は単一ではなく、同学会では、未病を2つに分類している。「自覚症状はないが、検査では異常が見られ、放置すると重症化するもの」を未病Ⅰと、「自覚症状はあるが検査では異常がないもの」を未病Ⅱとし、区別している。どちらもそれ以前の状態に戻れる、可逆性のある状態という点で共通している。

◆未病ビジネスの動きも活発化

超高齢社会を迎え、未病の考え方は今後ますます重要になるだろうという予想から、新しいヘルスケアビジネスとして育成しようとする動きも出ている。2019年2月、大手製薬、生命保険会社など8社が参加するコンソーシアム「湘南会議」は、未病ビジネスを共同で開発すると発表した。メタボリックシンドロームの中年男性などを対象に、職場などを通じて保険や身体トレーニングのサービスを提供する。コンソーシアムには、アフラック生命保険、SOMPOホールディングス、武田薬品工業、電通、ライオンなどが参加する。

一方、キリンホールディングスは19年7月、健康・未病の事業領域について、長期ビジョンの最終年にあたる27年に売上高1,000億円規模を目指すと発表した。とくに鍵を握るのが独自に研究を進めるプラズマ乳酸菌関連事業で、ウイルス感染リスクを減らすことで、インフルエンザや風邪に罹患しにくくなることが学術的に確認できている。同事業は米国やアジア各国へも展開していく計画だ。

未病ビジネスは、まだ始まったばかりだが、新たな市場創出とヘルスケアビジネスの新領域としての期待が広がっている。

【秋元真理子】